

中学部の実践 家庭と連携した言葉を広げる活動（日本語力が十分ではない生徒への支援）

【指導者】北村 雅俊

## 1 題材（課題）

「ICTで漢字マスター！」（タブレットを活用した家庭学習指導）

## 2 ねらい

- 中学部において、日本語力が十分ではない生徒に対して、家庭学習を通じた個別支援を行い、漢字の読み（ひらがな表記と発音）や語彙に対する理解についての指導・支援を行う。

## 3 目標項目との関連

「読む」ステージ3（教科につながる初歩的な学習）

- b 「日常でよく使われる語彙（教科名、曜日、標識など）を読んで意味がわかる。」
- c 「学年より下の学習漢字が混じった短文を読んで大意を理解する。」

## 4 児童生徒の実態について

本校の中学部では、日本語力が非常に高い生徒が大半である。また、国際結婚家庭の生徒が8割を占め、日本語力と同様に、中国語の力も高い生徒が多い。しかし、中学部全体で数名の生徒には、日本語力が十分ではない様子が見られる。日本語の日常会話は問題ないものの日本語での読み書きが難しい生徒、日本語の会話や読み書きに時間を要する生徒、日本語での日常会話に大きな課題がある生徒などが在籍している。

しかし、本校の体制では在籍学級において授業の中で個別支援を行うことが難しく、取り出し指導も実施していない。

そこで、何度かの臨時休校によるオンライン授業を経て培ったICTの知識・技術を活用し、家庭学習で彼らを支援することにした。

## 5 日本語支援について

本校では、臨時休校の期間中、オンラインにて授業を行った。その際、課題・テストのやり取りや、授業中の児童生徒の見取り・つまづき把握のために、ロイロノートというアプリを活用した。このアプリは、教師が用意したPDFや画像などのデータを取り出し、書き込むことができる。また、書き込んだデータを教師とやり取りすることも非常に容易である。さらに、音声を録音してデータ化する機能がある。

日本語に課題のある生徒の支援においても、このロイロノートを活用し、家庭で学習したことを効果的な指導・支援につなげていくことが期待できる。また、対面・オンライン通話でより具体的に指導を行うことにより、取り出し指導と同等の指導・支援をすることができると考えた。

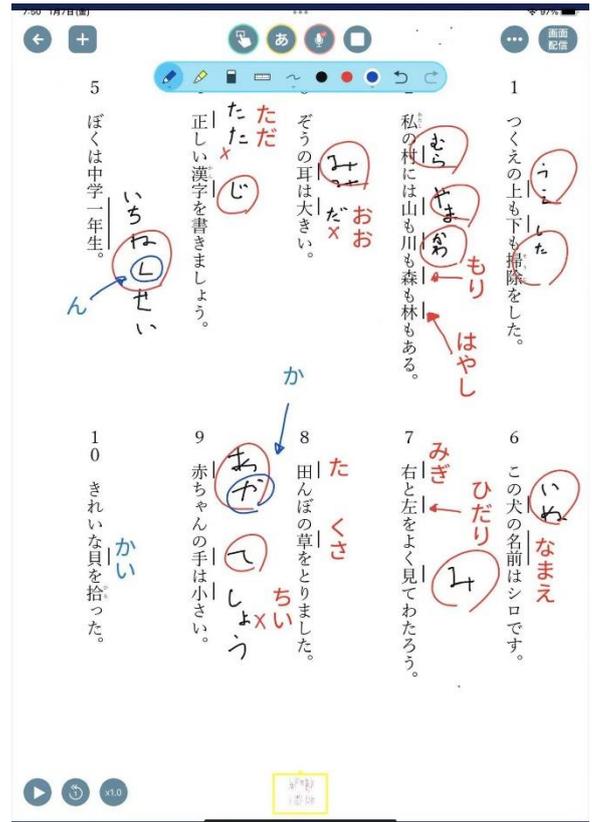
## 6 手順について

	【学習活動】 ※全てオンラインでのやりとり	【ポイント】
準備	<ul style="list-style-type: none"> <li>●教員は、教材を作成し、PDF データ化して学習の準備を行う。</li> <li>●生徒・家庭（保護者）は、タブレットなど必要な ICT 機器の準備を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○日本語支援の視点</li> <li>◆バイカルチュラルの視点</li> <li>○問題集などの教材を参考に、漢字の読み書きに関する教材を作成する。</li> <li>○生徒の実態と目的や活動内容について家庭（保護者）と共有し、家庭学習の指導ができる環境を整える。</li> </ul>
家庭学習	<ul style="list-style-type: none"> <li>●生徒は家庭学習として、自分の課題に合った教材を探して取り組む。（書き込みや録音など）</li> <li>●書き込みや録音のデータを指導する教員にオンライン（アプリ経由）で提出する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆生徒が意欲的に学習に取り組めるよう、家庭（保護者）とこまめに連絡を取り、活動の様子や成果と課題について共有し、家庭と学校が一体になって生徒の成長を認め支えられるように配慮する。</li> </ul>
指導	<ul style="list-style-type: none"> <li>●教員は、提出されたデータを添削してオンラインで返送する。</li> <li>●機会があれば、学校の休み時間や通話アプリなどの活用により、具体的な指導を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆生徒の努力や学習の成果を認め、前向きに取り組む姿勢を育てる。</li> <li>◆漢字の字体や言葉の使い方（中：風が大きい→日：風が強い）など、中国語との相違点・共通点についての気づきを共有する。</li> <li>◆中国語の知識を生徒が教師に伝える場面づくりなど、生徒が自信を持てるように配慮する。</li> </ul>

## 8 資料



タブレット活用の様子  
iPadとアップルペンシルを用いて添削・指導を行う



漢字の読みに関する自作問題  
生徒は漢字の読みを記入し、  
音声を録音して提出する。  
教師は添削・指導を行う

## 9 考察

### 【成果】

○個々の日本語の漢字・ひらがなの読み書きについて、つまずきの詳細を把握することができた。(下はその例)

- (i) 音読みと訓読みの区別が難しく、混同してしまう。
- (ii) 「東京」=ときょう、「弟」=おとなど、「う」の発音・読みが抜ける。
- (iii) 「学校」=がこう、「発達」=はたつ、など促音(「っ」)が抜ける。
- (iv) 「だ」や「が」などの濁点が抜ける。
- (v) 「か」と「カ」、「や」と「ヤ」など、ひらがなとカタカナを混同してしまう。
- (vi) 「鳥」=「鸟」、「会議」=「会议」など、中国語(簡体字)で書いてしまう。

上のようなつまずき(間違いの傾向)を具体的にアドバイスすることで、生徒たちの理解が深まると同時に、前向きに学習に取り組む意欲につながっていた。

○読みについて「発音(発声)」と「表記」が同時に指導できるため、非常に効率的だった。

◆個々の困り感に寄り添うことができるため、生徒・保護者が学校・教員に支えられていることを実感し、信頼関係につながっていた。

### 【課題】

○対面・オンライン通話のように双方向の指導ができない場合、どうしても家庭学習と指導にタイムラグが生じてしまう。

◆家庭でのICT環境(タブレットなどの機器・Wi-Fiの接続状況)が整わない場合、十分に指導することができない。

### 【まとめ】

以上のことから、日本語力が十分ではなく、漢字の読み書きに課題がある生徒にとって、ICTを活用した日本語の指導・支援は非常に有効な手立てであると考えられる。授業の中では支援が難しい部分を補って必要な指導ができるだけでなく、生徒の学習意欲・自己肯定感を高める側面からもメリットが多いからである。

また、本校ではタブレットなどの必要な機器の貸し出しなど、家庭のICT環境を補い生徒たちに必要な支援ができるように努力を重ねてきた。

ただ、時間に限りなく指導できることはメリットもある反面、生徒・教員の大きな負担にもつながる可能性がある。メリットを最大限に生かせるような体制・ルール作りが必要になっていくと考えられる。